

ドストエフスキイ研究会便り(5)

はじめに

「研究会便り」(3)と(4)の二回は、『カラマーゾフの兄弟』の冒頭に置かれた「一粒の麦」の死の譬え(ヨハネ福音書十二 24)の検討から入り、そこに存在するユダ的人間論とキリスト論の二つを原始キリスト教生成の核として捉え、ヨハネでは背景に押しやられてしまったユダ的人間論の痕跡を、パウロ書簡を含め新約聖書全体の中に辿りました。

ところで「ユダ的人間論」と「キリスト論」という二つの概念について、厳密な学問的定義・定説が存在するのか否か、残念ながら筆者は寡聞にして知りません。しかしここで用いる場合、筆者はそれらをどう考えるのか明解にすべきであり、以下に現時点での考えを記しておきたいと思います。ユダ的人間論とは、まずは師イエスを裏切り十字架上の死に追いやってしまった弟子たちに目を向け、その罪意識の帰趨を在りのままに捉えることで、広く人間の内に潜む根源的な悪魔性、つまり「聖なるもの」を否定し抹殺し去ろうとする心の闇に目を向け、そこから人間と神とキリストについて広く考えてゆこうとする立場である、このように考えます。他方キリスト論とは、何よりも十字架上の死に追いやられたイエスの復活、彼が死を超えた「永遠の生命」を与えられた出来事に決定的な意味を見出し、そこから改めてイエス・キリストを介した神による人間救済の経緯、神の愛と恵みと栄光に目を向け、人間と神とキリストについて広く考えてゆこうとする立場である、このように言い表しておきたいと思います。

これらの定義は、殊に後者はイエスの復活をどう捉えるかという問題とも関わり、誰もが納得する十分な定義とはなり得ないでしょうが、新約聖書のイエスの出来事全体に目を向ける時、これら対照的な二つの立場あるいは視点が大きく浮かび上がってくることは否定出来ないように思われます。これら二つを踏まえておくことは、聖書世界やそれを土台とするドストエフスキイ世界にアプローチをするにあたって、ある程度バランスのよい「思考の参照枠」を持つことになるでしょう。

例えば『カラマーゾフの兄弟』においてイワンやスメルジャコフについて考える場合は、前者のユダ的人間論の角度から見てゆくことで、またゾシマ長老の場合は後者のキリスト論の角度から見てゆくことで、作者ドストエフスキイが提示する彼らの様々な言説や行動について、明瞭に焦点が絞られてくるでしょう。勿論、前者と後者とが完全に切り離されているわけではなく、両者が複雑に絡み合うのが現実であることを忘れてはなりません。繰り返しますが、これら二つの概念とその定義は飽く迄も主観的なものであり、思索の一つの参照枠と言うべきものです。他にも様々な可能性があることを認めた上で、叙述を進めてゆきたいと思います。

以上のような基本的視野を確認した上で、今回の「研究会便り(5)」では『カラマーゾフの兄弟』の次兄イワンを取り上げ、この青年が辿る「肯定と否定」、闇と光のドラマを俯

瞰してみたいと思います。ドストエフスキイはイワンを、神殺しと父親殺しと兄弟殺しという三重の悪魔の業に踏み込ませ、『カラマーゾフの兄弟』の中ではスメルジャコフと共に、最も厳しい生を運命づけたと言えるでしょう。以下ではまずこのイワンの悪魔的かつ悲劇的な、そして喜劇的でさえある足跡を辿ることで、ドストエフスキイが彼に担わせた運命の内実を明らかにするよう努めたいと思います。そこから浮かび上がるイワン像とは、「神と不死」を求め「ホザナ！」を叫ぼうと熱望する青年が見つめる光と共に、彼が悪魔と共に沈んだ深い闇からも構成されるものであり、更にはその没落の先に彼を待ち受ける光をも遠く映し出すものとなるでしょう。言い換えればドストエフスキイはイワンをキリスト論とユダ的人間論の両極の間に分裂させ、その分裂の悲劇の先に、遠く微かにではあれ復活の光の可能性を望見させているとも言えるでしょう。

ドストエフスキイは新約聖書が十分に扱わなかったユダ的人間論を、イワンを介して見事にドラマ化したと考えられます。この「ロシアの小僧っ子」イワンの思索と行動の足跡を辿ることから我々は、福音書世界の十字架の前に立たされ、更にそれと重なる形で、極限化されたニヒリズム、非聖化の時代がもたらす頹落した緩慢な死を生きる現代人の意識と生にも直面させられ、それとの対決を迫られることでしょう。ドストエフスキイを介して、あのイエスが迫る「一粒の麦」の死の譬えの前に立たされるのは、「時代の子」「不信と懐疑の子」である我々自身でもあるのです。

叙述の仕方についても一言。今回のイワン論は、「研究会便り」の(3)と(4)において確認した新約聖書におけるユダ的人間論とキリスト論を土台として、まずは最初に求道者としてのイワン、「神と不死」を熱烈に探究する「ロシアの小僧っ子」としての肯定的イワン像を確認したいと思います。次にそれとは対照的なイワン、悪魔の否定の精神に憑かれた否定的イワン像に焦点を絞るという順序で叙述を進めます。つまり絶対究極の「ホザナ！」を得ようとするイワンと、ひたすら悪魔の否定の精神を生きるイワン。これら「肯定と否定」、二つのイワン像を別々に扱うことで、この青年が持つ光と闇の両面を際立たせ、ドストエフスキイが彼をその分裂の先、最終的にどこに行き着かせようとしたかを自ずと浮き彫りにすることが狙いです。しかし生きたイワンが持つこれら表裏一体二つの面は、実際にはそう容易には分離され得ず、殊に大審問官に対するイエス・キリストの接吻と、続くイワンに対するアリョーシャの接吻、これら二つの接吻を扱う部分は(イワン(二))、「肯定」と「否定」とが錯綜するクライマックスであり、叙述も錯綜したものとならざるを得ません。イワンにおける「肯定と否定」、光と闇を分離することは、飽く迄もここでの叙述の方便であることを確認した上で、「神と不死」の熱烈な探究者であるイワンの生きた全体像に迫りたいと思います。

「一粒の麦」の死の譬え(3/3)

— 『カラマーズフの兄弟』におけるユダ的人間論とイワン—

目次

第一回目、研究会便り(3)

- 問題提起・・ 5
1. 「一粒の麦」、ヨハネ福音書の文脈の中で・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- ヨハネのメッセージ
- 愛、十字架、永遠の生命
2. 時間と関係の多層性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8-12
- 過去・現在・未来、「時間の多層性」
- 神・イエス・弟子・読者、「関係の多層性」
- 第四の層、師と弟子たちとの断裂
- ドストエフスキイが見据えたもの

第二回目、研究会便り(4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

3. 福音書の「弟子たち」^{ユダ}・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
- ヨハネ福音書のユダ
- マルコの弟子たち^{ユダ}
- マルコの「空白」
- マタイと使徒行伝のユダ
- 弟子たちのその後、師との再会の闇と光^{ユダ}
4. 使徒行伝や書簡の「弟子たち」^{ユダ}・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
- 「ケーリュグマ」が記す「我らの罪」
- 闇と光、極性の弁証法
- 「使徒行伝」、ペテロの罪意識
- 「ヘブライ人への手紙」の罪意識
5. パウロの十字架・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25-32
- パウロの「罪」
- フィリピ人への手紙から
- ガラテア人への手紙から
- ローマ人への手紙から
- 十字架に「つけられる」のか「つける」のか？

《今回》

[ページ数は各回毎に1からカウント]

第三回目、研究会便り(5)

6.新約からカラマーゾフの世界へ	4
聖俗二つの死	5
イワン（一）、「ホザナ！」への希求	6
イワン（二）、「キリストの愛」の否定、「ユダ」イワン	14
イワン（三）、「悪業への懲罰」	22
ドストエフスキイのリアリズムの普遍性	26
《参考文献》	27
《付記》	28
《本論成立の経緯》	29



6.新約からカラマーゾフの世界へ

様々な問い

「一粒の麦」の死の譬えから出発した我々は、新約聖書が記す十字架の出来事の中でも、主に弟子たちの裏切りの顛末に的を絞って検討してきた。ここから湧き出てきた問題・疑問は少なくない。ユダやペテロを始めとして、イエスを十字架の上に追いやって逃げ去った弟子たちは、「其の信仰なきと、その心の頑固なると」の長いトンネルの中にいつまで留まり続けたのか。彼らが捕われた痛切な罪意識と悔恨とは如何なるプロセスを経て、また如何にしてその清算がなされたのか。そして彼らは如何なる光の下で、また如何にして新たに「一粒の麦」としての死を自らの身に引き受け、「永遠の生命」への新たな道を歩み始めたのか。あるいは「永遠の滅び」に沈んでしまったのか。そもそも「不信と懐疑の子」たる我々現代人が投げかけるこのような問いは、独自の「十字架の神学」を打ち建てたパウロの場合を除いて、新約聖書の信仰の場には馴染まず、全く別の角度からのアプローチが必要とされるのではないかと等々々々。様々な問い・疑問が湧き起こる。

新約の世界からドストエフスキイの世界へ

ここで我々は改めて『カラマーゾフの兄弟』に戻ろう。新約世界ではストレートに答を読み取り難いこれらの問題について、自らの文学空間に独自の聖書的磁場を創り出し、この上なく詳細かつ鋭利な切り口で思索を試みるのが、正にドストエフスキイではなからう

か。彼は殊にユダ的人間論の問題を、遺作『カラマゾフの兄弟』において徹底的に追求したと思われる。ここで彼が主人公たちそれぞれに演じさせるのは「一粒の麦」の死のドラマに外ならず、これは十九世紀近くの隔絶を超えて、新約諸書が覆いをかけてしまったユダたちのドラマの詳細を、我々の眼前に浮かび上がらせてくれるのではないか。この問題を次兄イワンに即して考えること。新約世界とドストエフスキイ世界と現代世界との往還。これが我々の最後のテーマである。

聖俗二つの死

新約の世界からカラマゾフの世界、その福音書の磁場へ。二つの世界を繋ぐべくドストエフスキイが置いたと思われる決定的な鍵、あるいは彼が創り出した福音書の磁場。それはカラマゾフの世界、かちくおいこみちよう家畜追込町において二晩の内に、正確には一日の内に立て続けに起こる二つの死、ゾシマ長老の死とカラマゾフ家の家長フョードルの死である。前者は「聖者」からの余りにも早い、余りにも強烈な腐臭の発生、後者は息子による父親惨殺という衝撃的な出来事によって、田舎町ばかりか国中を巻き込んでの大スキャンダルが巻き起こされる。それら二つの死はドミートリイ、イワン、スメルジャコフ、そしてアリオシャというカラマゾフの四兄弟にとって、遙か遠い世界に起こる第三者的な死などでは決してない。他ならぬ彼らこそがゾシマとフョードルとを死に追いやるのであり、彼ら一人ひとりがそれらスキャンダルの源であり、関係者どころか当事者そのものであり、要するに「ユダ」なのだ。イエスの十字架上の磔殺とそのままに、あるいは裏返しに重ねられた聖俗二人の死。これらの死と向き合い、兄弟たちは如何に自らの内なるユダ性、存在そのものが宿す悪魔的罪性に目覚めさせられ、自らを「卑劣漢」とする痛切な悔恨の末に如何なる光と出会い、如何にして「一粒の麦」としての死を身に引き受けるに至るのか。この作品でドストエフスキイが試みるのは、兄弟四人が各人各様に追い込まれてゆくユダ的罪意識の詳細克明な現象学的追跡と言うべきものである。これら闇と光のドラマを追うことから我々は、新約聖書が扱い切らなかったユダ的裏切りの心理的メカニズムについて、少なからぬ考察の手掛かりを与えられるのではあるまいか。

ここではこれら四兄弟を代表する存在として次兄イワンを取り上げ、神とイエスと、そして「キリストの愛」を巡るこの青年の「肯定と否定」のドラマを検討してゆこう。そこに展開するのは、ユダ的人間論とキリスト論を二つの核とする魂の分裂の悲劇であり、ここに新約世界と響き合うカラマゾフ世界のテーマが明瞭に確認されるであろう。なお叙述は、「肯定と否定」「信と不信」の間を絶えず激しく揺れ動くこの青年の思索と行動の足跡全体を、「肯定」と「否定」の二つの相に分け、それぞれの要約的な記述を順次試みたい。そのことでイワンの内なるユダ的人間論とキリスト論が明瞭に浮かび上がるであろう。またこれら二つを際立たせることで、作者が視野に置くイワンの「神と不死」探求の全体像の把握と、この青年が分裂の先に導かれる光の把握もより容易になるであろう。

イワン（一）、「ホザナ！」への希求

「ロシアの小僧っ子」まず

『カラマーゾフの兄弟』の読者がイワンからまず与えられる印象は、この青年がこの上なく鋭利な知性の持ち主であり、神を激しく弾劾し否定する「叛逆」の思想家であるという印象であろう。だがこの否定面にのみ目を向けることは、この青年の全体像を歪めてしまう危険性が少なくない。「肯定と否定」「信と不信」との分裂に苦しむ思想青年である前に、まずイワンとは激しい「生への渴望」に燃え、瑞々しい生命力に満ち溢れた若者なのだ。「生への渴望」を激しく内に燃やし、人間の心に宿る「神」という観念、「神の必要性という観念」について誤魔化しなく熱烈に取り組む求道青年、これがイワンなのだ。この点でイワンとは弟アリョーシャと同じ地平に立つ青年と言えよう。我々は作者ドストエフスキイがこれら二人の兄弟を、まずは激しい「生命への渴望」を内に滾らせる若々しい青年であるとし、それと共に熱烈に「神と不死」を求める求道者、究極の「ホザナ」を叫ぼうと熱望する「ロシアの小僧っ子」として提示していることを忘れてはならない。

カラマーゾフ家の兄弟たちに関して、これとほぼ同じ認識を持つのがラキーチンである。ラキーチンは、アリョーシャもイワンも含め、カラマーゾフ家全員の内には「父親譲りの好色漢」と「母親譲りの宗教的痴愚」、これら二つの血が脈々と流れていると言う。イワンの内に脈打つ激しい「生への渴望」と「神と不死」への強い探求心。これら二つが共にカラマーゾフ家の血から流れ出る根源的な生命力の相異なる表現としてあることを、この野心的な俗物青年は、イワンとアリョーシャへの強いコンプレックスに苦しめられつつも、むしろそれ故にこそ、的確に感じ取っていると言えよう。

問題はアリョーシャとは対照的に、この青年の内には悪魔が、つまり「否定」の精神が根深く宿っていることである。そのため「生への渴望」にせよ「神と不死」の探求にせよ、この否定の精神によって彼の魂は大きく分裂させられてしまうのだ。殊に「神と不死」の問題において、イワンの思索が「肯定」に向かえば向かうほど、また「ホザナ！」に近づけば近づくほど、それとは真逆の方向に「否定」の精神が発動されてしまうのである。「僕は君を導いて信と不信の間を絶えず行ったり来たりさせるのさ。正にここに僕の目的もあるのだよ」（十一9）。彼の内なる悪魔は、この「否定」の精神の発動が「太古からの定め」であるとさえ語る。闇と光の分裂を存在の奥深くに植え付けられ、しかもその分裂を「否定」の方向に大きく傾けて生きる青年、この厄介で困難な宿命を担わされたのがイワンなのだ。

イワンの内深くに宿る悪魔の否定の精神。このことを念頭に置き、我々はまず「神と不死」の熱烈な探求者、「ホザナ！」を高らかに謳うことを願う求道青年としてのイワンに焦点を合わせてゆこう。このイワンについて様々な情報を提供してくれるのは悪魔だ。作品の終盤近く（十一9）、父親殺しの罪の最終的な自覚が迫ったイワンの前に、彼自身の分

身たる悪魔が姿を現わす。悪魔はイワンのモスクワ時代、その「神と不死」探求の旅について半ば嘲笑的に延々と語り聞かせる。神との出会いの近づいたイワンを、「人神」思想を完成させつつあった頃のイワン、倨傲の精神の権化であった力溢れるイワンに再び連れ戻そうと試みるのだ。この悪魔による回想は、イワンの内で進む人格解体を反映した支離滅裂な形をとりながらも、イワンについて数々の重要な情報を我々に提供してくれるのだが、それらの中でも注目すべきは、モスクワ時代のイワンとは、否定の方向に刃を研ぎ澄ます「叛逆」の青年思想家である前に何よりもまず、ひたすら「神と不死」を探求し「ホザナ！」を求める「ロシアの小僧っ子」だったという事実である。悪魔が提供する情報は、必ずしも否定的イワン像を積み上げる方向にあるわけではなく、皮肉なことに、むしろその逆の場合が多いのだ。

以下に悪魔の回想に含まれる「肯定と否定」両方向の情報をバランスよく仕分けし、それらを時系列な線上で整理することで、まずは「ホザナ！」を求める肯定的イワン像を浮き彫りにするよう努めよう。

十七歳の「ホザナ！」

悪魔は既に十七歳のイワンが、「死後の生」を始めとして「法」も「良心」も「信仰」も一切否定したある思想家について取り上げ、この思想家が最終的には絶対の肯定に至り、「ホザナ！」を叫んだ顛末について一つの壮大な物語を創作していたことを明かす。

「死後の生」を否定してきたこの思想家は、自分の死後に初めて死を超えた来世、つまり「不死」が存在することを知るに至る。「これは俺の主義に反する」。抗議をした彼は裁判に付され、千兆キロもの距離の踏破を命じる判決が下される。当初は不貞腐れて道に寝転んでいたこの思想家は、最終的には何千億年とも知れぬ時間と無限とも思われる距離を歩き通し、その末に開かれた天国の門をくぐったのであった。この男は天国に入るや否や、二秒と経たぬうちに歓喜に包まれ、叫び声を上げる。「俺は千兆キロどころか、千兆キロの千兆倍、更にその千兆^{べき}倍でも歩き通して見せる！」。究極絶対の「ホザナ！」がここに発されたのだ。

細かい分析は必要ないだろう。早熟さと未熟さとが入り混じり、滑稽ささえ漂わせるこの物語が伝えるのは「神と不死」の否定と、他方究極絶対の「ホザナ！」への希求との間で「一切か無か」の^{ラディカル}両極的な思索を大胆に推し進める若者、熱い心を持つ「ロシアの小僧っ子」の姿である。しかも十七歳の時点でイワンの思索は、「ホザナ！」を謳い上げるという絶対肯定の線上に展開していたのだ。

養育者ポーレノフに才能を認められ、十三歳で一人モスクワの寄宿学校に送られたイワンが、果たしてどの時点で「神」という観念、「神の必要性という観念」に心を引きつけられ始めたのかは明らかでない。この伝説においても「来生」、つまり死を超えた「永遠の生命」「不死」がテーマであり、天の裁きや天国の門について言及はされるものの、具体的に神やイエス・キリストに関する考察の跡はストレートには示されない。これは未だ観念的

で未熟な宗教的思想劇と呼ぶべきものであろう。だがこの若者はモスクワで「ホザナ！」を目指し、一人この種のラディカルな思索を展開していたのだ。その出発点は十七歳よりも相当早かったと考えるべきであろう。

三本の十字架とキリスト

イワンが聖書と取り組み、イエス・キリストの内に「ホザナ！」を見出そうとしていたとの情報を与えてくれるのも悪魔である。しかも悪魔によれば、この青年はイエス受難史の終結部であり頂点をなす十字架磔刑に焦点を絞り、「キリストの愛」について思いを凝らしていたというのだ。十七歳の「ホザナ！」の延長線上にあるエピソードとして、またその後のイワンの聖書との本格的な取り組みを指し示すエピソードとしても、これは看過できない情報である。(十字架に的を絞るイワンについては、次章でも考えよう)

さて悪魔が言及するのは、ルカ福音書第二十三章が伝えるイエス磔刑の場面だ。共観福音書は一致して、ゴルゴタ丘上にはイエスの十字架を中心として三本の十字架が立てられていたと報告する(マタイ二十七 38、マルコ十五 27、ルカ二十三 33)。マタイとマルコはその事実を記すのみだが、ルカはこれら三本の十字架上で、イエスと二人の罪人との間で交わされた対話を記す。つまり左隣りの十字架につけられた罪人はイエスに対し、お前が本当に救い主ならば自分自身とこの俺たちを救ってみろと毒づいたのに対し(ルカ二十三 39)、この罪人を諫めて神への畏れを迫り、またイエスの義しさを認めて自らの罪を悔いた右隣りの罪人は、イエスに憐れみを乞うて受け容れられ、天国を保証されたと記されるのである(同 41-43)。この光景を目の当たりにした悪魔はこの後、イエスが自分に憐れみを乞うた右隣りの罪人の魂を抱き、「ホザナ！」を謳う大天使・小天使たちの歓喜の声と共に天に昇ってゆく光景を目撃し、自らも危うく「ホザナ！」を叫びそうになったと語る。

ところが注意すべきことに、実はルカ福音書には罪人の魂を抱いたイエス昇天の光景も、また天使たちの「ホザナ！」絶叫の場面も存在せず、またこれらは他の福音書のどのイエス磔殺の場面にも記されていない。ルカはイエスが憐れみを乞うた罪人に対し「誠に汝に告ぐ、正に今日、我と偕にパラダイスに在るべし」(二十三 43)と語ったと記すのみなのだ。イワンはルカが報告するゴルゴタ丘上の三本の十字架の場面を基に、彼自身の救済者イエス・キリスト像を創り上げたのであろう。千兆キロの劫罰と「ホザナ！」の伝説の創作から更に進んで福音書と取り組み、イエスの言説中に究極絶対の「ホザナ！」を見出そうとする若き熱烈な求道者イワンの姿が浮かび上がってくる。

だがこの時イワンは「ホザナ！」を叫ばずに終わる。間一髪のところ「常識」という名の、悪魔の否定の精神が発動されてしまったのだ。悪魔の否定の精神については次章での検討に回し、今はまずイワンの「肯定」の方向での思索を辿ってゆこう。我々が焦点を当てつつあるのは福音書に記された十字架上のキリストを凝視し、そこから人間に向けられた超越的な愛、「キリストの愛」について思索するイワン、つまりキリスト教の本質に真正面から向き合う熱い求道青年イワンである。

イワンと福音書

ところで「ホザナ！」を求めるイワンの足跡を辿ってゆく時、我々はその問いの前に立たされる。イワンはいつから福音書と向き合うことになったのか。優秀な頭脳のゆえに既に十三歳、高等中学校入学時からモスクワに送られ、大学理系への進学を果たしたこの青年が、文学・哲学・芸術を含めた幅広い教養の中に新約旧約の聖書知識を組み込んでいたとしても何ら不思議はないであろう。だが十七歳にして既にあの千兆キロの劫罰と「ホザナ！」の伝説まで創作していたイワン、「神と不死」の熱烈な探求者であるこの「ロシアの小僧っ子」が、その後聖書との取り組みの中でも福音書、殊に十字架のイエス・キリスト凝視に向かったこと。このイエスに向けて青年を突き動かす何か決定的な要因があったとするならば、それはどこに見出せるのであろうか。

モスクワ時代のイワンの思索に関する主な情報源は二つ存在する。故郷家畜追込町の料亭「みやこ」におけるアリョーシャとの対決と、先に記した悪魔が明かすモスクワでの思索の足跡である。我々の問いに対する手掛かりは前者の「みやこ」にあり、ここでイワンが弟に語り聞かせる「叛逆」の思想の中に見出し得るように思われる。この「叛逆」の思想は次章で追う否定的イワン像、つまり悪魔の否定の精神に憑かれたイワンの思索の中核をなすものであり、次章を俟たず、ここでも簡単に見ておこう。

人間の心の内にいつの間にか宿った「神」という観念、あるいは「神の必要性という観念」。この不思議の前に佇み、この不思議を正面から解こうとした真摯な青年がイワンである。「神」という観念の持つ不思議を巡り、作者が「ロシアの小僧っ子」イワンに付与したこの真摯かつ本質的な思索の姿勢は、いくら注意しても注意し過ぎることはないであろう。だがこの「神」を求め、また死を超えた「永遠の生命」を求め、そこに絶対不動の「ホザナ！」を得ようとするイワンがぶつかったのは、ユークリッド的知性の限界性という壁であった。時間空間の限定性の内に閉じ込められた人間の認識能力には、超越的存在の認識は不可能である。彼が行き着いたのはカント的認識論の角度からの神否定であり、次いで地上に満ちる不条理への凝視から来る神の否定と弾劾、より正確には倫理的角度からの神の世界の拒否である。その末にイワンの目の前に広がった世界とは、罪なき幼な子たちの涙が流され続ける不条理の世界であり、それはただ彼の「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」が駆け巡るだけの殺伐たる荒野でしかなかったのだ。これがアリョーシャに語るイワンの「叛逆」の思想の概略あらましと言えよう。「叛逆」という言葉の内に見出されるのは、実質的には「神と不死」の熱烈な探究者イワンの姿なのである。

さて神が追放された荒涼殺伐たる地上の荒野。そこでイワンの視野に捉えられたのが福音書であり、殊にゴルゴタ丘上の十字架で磔殺されたイエスの存在と、「キリストの愛」であったと考えるのが、イワンの思索を辿るにあたって最も自然な道筋であろう。もしイエスがこの不毛そのものの荒涼殺伐たる地上世界で神を愛として捉え、あるいは神の愛に捕えられ、神に「父よ！」とさえ呼びかけ、遂には十字架上で磔殺されるに至るまでその愛

を貫いたとするならば、イワンにとりイエスが流した血、「キリストの愛」は既にそれ一点で、自分の神否定の思索と論証、「叛逆」の思想一切を覆す「アルキメデスの槌子」ともなりかねず、またこの一点を以って地上の荒涼殺伐たる荒野は最早荒野でなくなるであろう。福音書のイエスの存在は、「叛逆」の思想青年イワンの視野に恐らくは決定的な意味と重みを持って立ち現れたに違いない。

このようなイワンとイエスとの出会いは何時如何になされたのか。これはイワンと「神」の観念の出会いと同じく、『カラマーゾフの兄弟』において描かれることのない最も大きな謎の一つであり、我々読者の想像力を強く掻き立てる問題の一つである。だが我々は、モスクワにおけるイワンの「神と不死」探求の足跡について、悪魔とアリョーシャが与えてくれる情報を上のような線上に整理することで、この「謎」への答と出来るであろう。

ここからモスクワのイワンの思索の全体像が、おぼろげながらも一つの流れを以って構成されるであろう。彼が高等中学校で学ぶべくモスクワに送られたのが十三歳。千兆キロの劫罰と「ホザナ！」の伝説の創作が十七歳。「大審問官」の叙事詩の創作が二十三歳。恐らく二十歳前後の大学生イワンは、罪なくして涙する幼な子たちの現実、人間と世界と歴史の不条理と向き合う中から、神を激しく弾劾し否定する「叛逆」の思想家となっていったことが推定される。だがその一方で、本来「ホザナ！」を切望する求道青年イワンは、福音書のイエス・キリストを凝視し、その十字架と「キリストの愛」の真実性と現実性に強い関心を持ち、聖書的磁場での思索を進める青年ともなっていたのだ。つまり地上の不条理、人間の持つ罪性についての認識が深まれば深まるほど、イワンのイエスと「キリストの愛」に関する思索もまた深化していったと考えられる。彼が見つめる十字架についても、ルカ福音書が伝える十字架上のイエスに憐みを乞うた罪人から、イエスに毒づいた罪人へ。その思索の焦点は、イエスの十字架の右隣りから左隣りへと移し変えられ、人間の罪性とそれに注がれる「キリストの愛」についての思索は、両者が表裏一体となって加速度的に深まっていったことが推測されるのである。そしてこのイエスの左隣りの罪人を、人間と世界とその全歴史が示す現実に重ね、「人間の中の悪魔性」と「キリストの愛」の対決として正面から考察するに至ったのが、「大審問官」の叙事詩と位置づけられるであろう。

「キリストの讚美」としての「大審問官」

家畜追込町の料亭「みやこ」においてイワンとアリョーシャ兄弟が繰り広げる戦いとは、ゴルゴタ丘上の十字架のイエスに収斂する戦い、地上における「キリストの愛」の究極の真実性と現実性を巡る「肯定と否定」の戦いである。いよいよ時の到来したことを見定めたイワンが、満を持してぶつけるのが「大審問官」の叙事詩、彼が全力を傾けたキリスト論である（五五）。これは人間と世界とその全歴史を向こうに置いて、イワンが福音書のイエス・キリストと真正面から取り組んだ、モスクワにおける思索の結果の決算書とも言うべきものであり、自らの頭の内に組み立てたこの物語を、彼は弟に語り聞かせるのである。

「肯定と否定」が複雑に入り混じる「大審問官」の叙事詩の細部に迷い込むことを避け

るために、またイエス・キリストと神とに対するイワンの姿勢を明解にするためにも、我々はまず先に「大審問官」に対してアリョーシャが発する二つの言葉、相反する二つの方向での評言に目を向けておこう。

「兄さんの劇詩はキリストに対する讃美であって、弾劾ではない」（五五）

「兄さんの大審問官は神を信じていない。それが秘密の全てです！」（同上）

「兄さんは神を信じていないのです」（同上）

アリョーシャは「大審問官」の内にある、そして「大審問官」の作者兄イワンの内にある「肯定と否定」の分裂と矛盾を的確に見抜いたのだ。キリストを理解し讃美するイワンが、実はキリストが人間の心に向かわせようとした神を信じてはいないこと。これは既に我々が確認してきたイワン、つまり「神と不死」を求める求道青年であると共に、その神を否定するに至った「叛逆」の思想家イワンが抱える本質的な矛盾・分裂と連なる姿勢である。これを踏まえ、「キリストの讃美」としての「大審問官」の叙事詩を見ておこう。

再臨のキリストの登場

注目すべきは「大審問官」の冒頭だ。中世スペインのセヴィリアの街に再臨のキリストが登場するや、民衆は直ちにそれが「キリスト」であることに気づく。ここでイワンが重ねて語るのは、地上への再度の登場を決意するに至ったキリストの、民衆に対する「計り知れない同情心」と「限りない慈愛の心」である。キリストの胸には「愛の太陽」が燃え、その眼には「(神の)光明と叡智と力」が宿されている。一方「それに応える愛で心を打ち震わせる」民衆。彼らの内にも熱い「信仰の炎」が燃えている。「ホザナ！」の熱烈な探究者「ロシアの小僧っ子」にして初めて可能な、見事なキリストと民衆との出会い、両者の間に燃える愛と信の一瞬にしての響き合いである。イワン自身も語る。「この場面がこの叙事詩の最も優れた場面になるだろう」。ここに「叛逆」の思想家の影は微塵もない。兄の口から語り出されたこの場面を耳にしたアリョーシャの驚きと感動も想像に難くない。

続いて描かれるのは、この熱狂の中でイエスが行う二つの奇跡だ。まずは「幼くして盲目となった老人」の懇願を容れた癒しの奇跡。そして「タリタ・クム（娘よ、起きよ）」、死せる少女復活の奇跡である(マルコ五21-24/35-43、マタイ九18-19/23-26、ルカ八40-42/49-56)。高揚した口調で語られるこれら奇跡の詳細は、ここでは省略しよう。

「大審問官」の叙事詩冒頭が我々に伝えるのは、イエスと「キリストの愛」について、イワンが示す理解の驚くべき深さである。続く「荒野の試み」を巡る大審問官の弁論、叙事詩の中核部が示すキリスト像もまた、イワンが如何に深く福音書を読み込み、イエス・キリストの本質について思索し、また感動もしていたかを証するものだ。

「荒野の試み」

セヴィリアの街への登場。一瞬にしてなされる民衆の認知。熱狂的な歓迎と、その中で行われる奇跡。キリストは直ちに大審問官によって逮捕される。牢獄を訪れた大審問官が沈黙のキリストを相手に繰り広げる大弁論。これは福音書の「荒野の試み」(マタイ四 1-11/マルコ 12-13、ルカ四 1-13)を土台としたキリスト論と人間論からなり、イワンの「大審問官」の叙事詩の中核をなすものである。三つの「荒野の問答」の中で、大審問官が主に取り上げるのは第一の問答だ。「なんぢ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと爲らしめよ」(マタイ四 3)。こう悪魔から問いかけられ、直ちにイエスは返す。「^{ひと}人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出ずる凡ての言葉に由る」と録されたり」(マタイ四 4)。この問答を「地上のパン」と「天上のパン」の問題として、また人間の神に向かう自由の問題として論じる大審問官の弁論は、福音書のイエスを凝視してきたイワンの思索の総決算と言うべきものであろう。

大審問官によればイエスとは、人間の生の究極の糧は神から与えられる「天上のパン」であるとし、また人間は神から「天上のパン」に向かうべき自由を付与されているとするイエスである。つまり神と人間への絶対の信と愛を示すイエスに他ならない。更に大審問官によれば、通りがかりの者たちから「いま十字架より下りよかし、然らば我ら彼を信ぜん」、このような冒瀆と嘲笑の声を投げつけられても、イエスは決して十字架から下りることはしなかった(マタイ二十七 42/[39-44、マルコ十五 29-32、ルカ二十三 35-38])。イエスが人間に望んだのは神に向かう自由な信に外ならず、如何なる形であれ、奇跡への信などではなかったのだ。ここにいるのは人間に対するイエスの絶対の愛と信を見据えるイワン、「キリストの愛」に深く心を動かされたイワンである。「兄さんの劇詩はキリストに対する讚美であって、弾劾ではない」。アリョーシャの叫びは、このイワンへの感動から発した叫び以外の何物でもない。

続く大審問官登場の必然に関する長大な論証。ここに展開されるのは、自分に与えられた神に向かう自由に耐えられず、その自由を大審問官に譲り渡してしまった人間、「聖なるもの」を裏切る「人間の中の悪魔性」を凝視し暴露するイワンだ。いよいよここから「叛逆」の思想家イワン、神の否定に続いて「キリストの愛」をも否定し斥けるイワンが登場する。(この悪魔の否定の精神に憑かれたイワンについては、次章で検討しよう)

否定的イワン像の検討に進む前にもう一つ、「聖母の地獄(責苦)巡り」を見ておこう。これは彼が「大審問官」の劇詩を語り出すにあたって、その導入部のように語る物語、東方修道院に伝わるギリシャの古詩から採られた物語である。ここにあるのは「キリストの愛」について思索を深めるイワンが、更に聖母や神の愛と慈悲にも目を向ける姿であり、絶対肯定のイワンとも言うべき姿が確認できるであろう。

「聖母の地獄(責苦)巡り」

この物語の主人公はイエスの母、聖母マリアだ。地獄を訪れた聖母は、そこの「火の湖」

に埋められ、「神からも忘れ去られ、苦しみにのたうつ罪人たち」を目にして、涙ながらに神にこの罪人たちへの赦しを懇願する。だが神はマリアに向かい、手と足を釘付けにされた十字架のイエス・キリストを指し、この子を苦しめた彼らをどうして赦せようかと問い返す。聖母はなお天使たちと共に必死に神に哀願し、罪人たちに対する慈悲を乞い続けるのであった。神は遂に聖母の愛に打たれ、受難週の金曜日から五旬節までの間だけ地獄の責苦は中止される。

イエスを十字架上の磔殺に追いやったため地獄の底に落とされ、劫罰にのたうつ罪人たち。その罪人たちに注がれる聖母マリアの愛。そして聖母マリアの愛を受けて示される神の慈悲と愛。恐らくキリスト教について考える上で必要不可欠な要素のほぼ全てが、この上なく簡潔平明に織り込まれた見事な物語だと言えよう。これはイワン自身の創作によるものではない。また彼がこのギリシャの古詩あるいは物語をいつどのようにして知ったのかも明らかではない。だがこの極めて短い物語は、福音書を巡る青年イワンの思索が如何なるところに焦点を絞り込んでいったかを示す、この上なく重要な指標となる。

聖母マリアの愛に目を注ぐイワン。このイワンは、先のルカ福音書の三本の十字架を見詰めるイワンから遙か先に歩を進め、新たな十字架理解に至りつつあるイワンである。先にこの若者が凝視したのは十字架上で悔い改めた罪人であり、その魂を抱いて昇天してゆくイエスであった。だが今や彼が聖母マリアを介して見詰めるのは、この悔い改めたイエスの右隣りの罪人も、またイエスを罵った左隣りの罪人も超えて、他ならぬイエスを十字架につけて殺した全ての罪人たち、否、罪ある人間全てとさえ言うべきであろう。

また翻って彼の思索が向かうのは、愛する息子イエスを磔殺した罪人たち、罪ある人間全てに注がれる聖母の愛と、この聖母の愛に動かされる神の慈悲と愛に対してである。人間の罪性を見つめるイワンと、その罪性に注がれる超越者の愛と憐みへの目。十字架のイエスを凝視するイワンの思索は、「否定と肯定」それぞれの方向で、決定的な深まりを見せたのだ。そしてその極にある認識が次章で見る、「キリストの愛」を裏切ったユダたる大審問官に対する、イエス・キリストの接吻を巡って表現されるであろう。

「肯定」から「否定」へ

以上見てきたように、作者ドストエフスキイがイワンに積み重ねさせた聖書知識と思索の奥深さは、この青年が如何に熱烈かつ真摯に「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」であったかを示すものである。悪魔が明かすモスクワ時代のイワンの足跡とは、その殆ど全てが「ホザナ！」を熱烈に求め、福音書のイエスと「キリストの愛」を追う求道青年イワンの足跡であり、「キリストの讃美」に向かって収束する足跡であると言っても過言ではないだろう。

先にも確認したように、悲劇はアリョーシャとは対照的に、この青年の心の奥深くに悪魔の否定の精神が宿り、「神と不死」に関する彼の思索が肯定に向かえば向かうほど、また「ホザナ！」に近づけば近づくほど、それとは真逆の方向に否定の精神が発動されてし

まうことだ。次章ではこの悪魔の否定の精神に的を絞り、「ロシアの小僧っ子」イワンが悪魔と共に示す、今までとは逆の方向の足跡を追ってゆこう。

イワン（二）、「キリストの愛」の否定、「ユダ」イワン

「否定」の精神

本章ではイワンの「否定」の精神に目を向けよう。前章では専ら「ホザナ！」を求めるイワンの「肯定」面に目を向け、主に悪魔の言葉を参考にして、「叛逆」の思想家イワンのイエスとの出会いから、イエスの十字架と「キリストの愛」理解の深化に的を絞って検討してきた。以下では、イワンが故郷の料亭「みやこ」で弟のアリョーシャと対決する場面を改めて検討しよう。ここでイワンが示すのは、「叛逆」の思想における神否定に続いて、「大審問官」物語におけるイエスと「キリストの愛」の否定であり、更にその後が続くのは、悪魔の否定の精神が最終的な凱歌を上げる「人神」思想である。ここにいるのは、アリョーシャが「兄さんは神を信じていないのです」と叫ぶ悪魔イワンに他ならない。

前章で既にイワンの思索の対象・テーマは明らかとなっている。以下では必要な部分を除いては繰り返しを避け、叙述は出来るだけ簡潔を目指したい。

神の否定と弾劾、「叛逆」

イワンが展開する神とその世界の否定と弾劾の論証、つまり「叛逆」の思想は既に見たように、彼が「神」という観念に強く魅せられ、真摯この上ない「神と不死」の探究者であるがゆえにこそ、一層強く読む者の魂を震撼させる恐るべき力を持つものである。前章で見たようにまず彼の神否定は、超越的存在の認識は人間のユークリッド的知性の守備範囲内にはないとするカント的認識論の角度からなされる。神を熱烈に追い求めるイワンが、認識論的潔癖さから、神を天上に追いやるという悲劇的逆説である。次いで彼はこの地上に満ちる不条理、罪なくして涙を流す幼な子たちの現実がある限り、神の存在は認められないと宣言する。ここにあるのはイワンの倫理的潔癖さであり、闇の中から響くこの青年求道者の痛切な叫びである。認識論的神否定から倫理的神弾劾と神の世界の否定へ。この否定精神の行き着く先、イワンの目の前に広がる世界とは、およそ意味の意味たる一切を奪われた世界、「一切が単純直截に因果関係の連鎖で生じ、一切が流れてゆき、釣り合いを保っている」だけの絶対的無価値の世界でしかない。そこはただ彼の「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」が駆け巡るだけの殺伐たる荒野でしかないのだ。『カラマーゾフの兄弟』の頂点の一つをなす圧倒的な悪魔的悲劇的論証である。我々はここにイワンと重ねられたドストエフスキ自身自身の魂の苦悩、「時代の子」「不信と懐疑の子」が捕らわれた苦悩も読み取るべきであろう。

この真摯な求道青年の思索が行き着いた神なき広漠たる荒野、ただ「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」が駆け巡るだけの殺伐たる不毛の荒野。先に我々は、そこでイワンが

出会ったのが福音書のイエスと「キリストの愛」であると考えた。底知れぬ闇に下りて初めて、彼は光との出会いを与えられたとも言えよう。

十字架への感動、そして「ホザナ！」の拒否

イワンの福音書との取り組みは通り一遍なものではなかった。このことを証するのは、彼が十字架のイエスに焦点を絞っていたという事実である。福音書に触れても、普通どこに焦点を絞るべきか掴むことは容易でない。焦点はイエスの「神の国」の宣教にあるのか、病の癒しや悪鬼の追放を始めとする数多くの奇跡にあるのか、弟子たちとの伝道生活にあるのか、あるいは論敵との戦いにか、エルサレムでの受難物語にか、十字架上の死と復活にか、等々等々。目の前に展開する事柄は数多く、果たしてイエスの出来事を中心が何処にあるのかなかなか理解し難いのだ。原始キリスト教生成の最初期において、生前のイエスの言説や振舞いには殆んど目を向けず、イエスの生が極まる十字架にひたすら目を凝らし、イエスの出来事について思索したのはパウロであった。彼は十字架を介してなされた神の救済の業、神とイエス・キリストから人間に向けられた愛と信に焦点を絞り、そこから「十字架の神学」(ルター)とも呼ばれるキリスト教思想の土台を築いたのであった。イワンもまた、何よりもまず十字架を凝視し思索する青年だったことは、思想家としての知性の鋭利さばかりでなく、真摯かつ熱烈な求道者としての鋭利さも証するものとして、最大限に注目すべきであろう。

悪魔はこの青年が、十字架上のイエスが右隣の罪人をかき抱いて昇天してゆく光景に「ホザナ！」を叫びかかったと明かす。地上を支配する不条理を前に、その救済主としての神を見出そうとして叶わなかったイワンにとって、十字架上のイエスが表わすものとは、罪人に向けられた愛と憐みと赦し、つまりは「キリストの愛」に他ならなかったのだ。彼はこの感動をアリョーシャに向かい、こう言い表す。「人間に対するキリストの愛はこの地上ではあり得ない一種の奇跡だ」(五4)。

しかし既に見たように、十字架上の「キリストの愛」に心を揺り動かされたものの、この時イワンは結局「ホザナ！」を叫ぶことはなかった。間一髪のところ「常識」という名の、悪魔の否定の精神が発動されてしまったのだ。

「だが常識が、そう僕の最も不幸な特性がギリギリのところ僕を引き留めて、僕は折角の瞬間を逃してしまった！と言うのも、自分が《ホザナ》[μαῖ]を叫んだりしたら一体どういうことになるだろうなどと、その瞬間に考えてしまったからだ。直ちにこの世界では全てが消え去り、何の出来事も起こらなくなってしまうだろう」(十一9)

イワンを「ホザナ！」の直前にまで導きながら、結局は彼にそれを斥けさせてしまった「常識」。悪魔はこの「常識」という名の否定の精神が、自分の「最も不幸な特性」だと語

る。しかも悪魔は「常識」による「ホザナ！」の否定こそ、「世界の存続にとり必要不可欠なもの」だとさえ語るのだ。このイワンの「常識」、悪魔の否定の精神は「ホザナ！」の否定から更に進んで、「大審問官」の叙事詩における「キリストの愛」の否定へ、そして最終的には自らを「人神」とするまでに至るであろう。この青年にとり、何か目に見えない決定的な力の働きである「常識」、この否定の精神の発動がそのまま無限循環を続けてゆくのか、あるいは「否定」を否定して究極絶対の「肯定」へと逆転するのか、我々は最大限の注意を以って見守る必要があるだろう。

「大審問官」における否定、自由論

「大審問官」の冒頭に戻ろう。再臨のキリストの登場と続く二つの奇跡。ここに表現されたのは、イエスと「キリストの愛」についてイワンが持つ深く鋭い理解と感動であった。続く「荒野の試み」を巡る大審問官の弁論。「大審問官」物語の中核部とも言うべきこの部分において、「天上のパン」と「地上のパン」を巡って描き出されるイエスとは、人間に対して絶対の自由の内に神に向かうことを望み要求するイエスである。神と人間の間にある自由を見つめるイワン。ここにあるのもまた、福音書とイエス・キリストに関するイワンの理解の驚くべき深さだ。だが注意しなければならない。正にこの自由論を土台とするイエス・キリスト像の提示こそが、イワンがイエス・キリストを斥け、それに代って人間を支配し奴隷とする大審問官を登場させる^て梃子となるのだ。大審問官として、より正確には大審問官の自由論として、いよいよ正面から姿を現す悪魔の否定の精神。その十全な理解のためにも、以下に大審問官の自由論の要旨を、次のように纏めておこう。

大審問官によれば、イエスの宣教の根幹は、人間は自らに与えられた自由を基に神に向かわねばならないという一点にあった。だが人間はその生来の弱さと卑劣さと愚かさゆえに、イエスが説く神に向かう自由を受け止め切れず、その自由をむしろ重荷とするだけであった。このイエスと人間との間にあって、イエスの人間に対する絶対の信と愛を知り、また人間本性の弱さと卑劣さと愚かさをも知悉し、かつその人間を愛さずにはいられない存在が大審問官であった。そしてこれら両者の板挟みの苦悩が大審問官を追いやった結論とは、人間からその自由を取り除いてやること、つまり神の名の下に人間に「地上のパン」を与えてやることであった。たとえそれがイエスの宣教を歪め、人間を神から遠ざける結果となろうとも、そして「天上のパン」に代る偽りの満足と平安を付与することで、人間を大審問官の支配と管理の下に「ひれ伏させる」という隷属への道に繋がろうとも、そのことにより人間は自由の重荷から解放され、ともかくは平安の内に憩うことが可能となるであろう。

人間への絶望と軽蔑

イワンが大審問官に提示させる自由論。この背後にいるのは福音書のイエスを凝視し、イエスの本質が人間を絶対の自由の内に神に向かわせること、つまり人間への愛と信であ

ることを見抜いたイワン、一言で言えば「キリストの愛」に感動するイワンだ。だが同時に更にその背後に身を潜めるのは、イエスが説いた神に向かう自由を受け止めることの出来ない人間の弱さと卑劣さと愚かさを見つめるイワンである。「大審問官」物語の根底にあるのは、この人間の現実を見つめるイワンの厳しい目と、そこから生まれる人間への強い絶望と軽蔑であると言えよう。あの「叛逆」の思想家イワンのそのまま延長線上にある絶望と軽蔑である。

イワンの大審問官の狡猾さとは、この絶望と軽蔑の上に立ち、自らはこの人間の弱さと卑劣さと愚かさとは戦うことをせず、むしろそれを利用する所にあると考えるべきであろう。この人間の負の現実と戦い、それを正させ癒そうとしたのがイワンの感動したイエスであり、「キリストの愛」ではなかったか。そのイエスは他ならぬ人間の弱さと卑劣さと愚かさによって十字架の上に磔殺されてしまったのだ。イワンの大審問官はこのイエスと十字架から目を逸らし、人間を神に向かわせようとも、「天上のパン」を求めさせようとする事もない。むしろ人間の負の現実の上に胡坐をかき、人間を神に向かわせようとしたイエスを斥け、そのイエスの名の下に、人間を自らの奴隷としてしまったのである。ここにまず我々が見るべきは、人間と世界とその全歴史が示してきた不条理、それに対するイワンの底知れぬ怒りと絶望、そして軽蔑であろう。後に見るように大審問官の本質を見抜いたアリョーシャに対し、イワンは自らそれを「虚偽と欺瞞」と呼ぶ。狡猾さどころか、彼は自らが築き上げた大審問官の論理の矛盾と分裂、「虚偽と欺瞞」に気づいてもいたのである。この「欺瞞と虚偽」の行き着く先については、次章で見よう。

世界のユダ的現実

かくしてイワンによれば、人間は二種類に分けられることになる。一方にいるのは自らが「善悪の認識という呪いを背負い込み」、イエスを裏切りその「偉業を修正し」、偽りの愛の名の下に人間を奴隷とするに至った大審問官。他方にいるのは、イエスから示された神と「天上のパン」に向かうべき自由を、「地上のパン」欲しさに嬉々として大審問官に譲り渡してしまった人間、つまり神とイエスを裏切り「永遠に背徳的で永遠に下劣な」人間である。つまりイワンにとりこの地上世界とは、「選ばれし少数の大審問官」と、その支配下にある大多数の「意気地なしで、哀れな子供のような」「鷲鳥のような」人間たちが占拠する世界なのだ。だがこれら両者はとどのつまり、人間に対する神の愛と信を生きて証し、絶対の自由の精神を以って人間を神に向かわせ、「天上のパン」を求めさせようとしたイエスを裏切り、十字架に追いやるユダたちという一点に帰されると言えよう。イワンが暴き出すのは、神と人間に対するイエスの絶対の信と愛を無にする人間の現実そのもの、全人間がその全歴史を通じて示してきたイエス・キリスト疎外、「キリストの愛」の否定という「人間の中の悪魔性」に他ならない。

人間と世界とその歴史に関する、イワンの認識の見事な鋭利さだ。だがこのイワンの鋭利な認識が、矛盾と分裂を孕むものであることをもう一度確認しておこう。彼の認識の土

台にあるのは、どこまでも人間の弱さと卑劣さと愚かさ、一言で言えば「人間の中の悪魔性」を凝視することから生まれた、深い絶望と軽蔑である。ここからイワンは二つに分裂するのだ。一方では十字架に至るまで「人間の中の悪魔性」と正面から戦ったイエス、「キリストの愛」に感動するイワンである。他方ではそのイエスと「キリストの愛」を斥ける「人間の中の悪魔性」を利用して、自らを地上の支配者としようとする大審問官の創作者イワンである。イワンの内なる絶対矛盾。最終的にイワンは悪魔の否定の精神に自らを任せ、大審問官の側に身を置いたのだ。「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」が駆け巡るだけの荒涼たる地上世界。そこでイエスと出会ったイワンが最終的に行き着いたのは、そのイエスをも、イエスが指し示す神をも抹消する「人間の中の悪魔性」、彼自身の内なる「ユダ」だったのだ。このイワンの分裂と矛盾、そして「虚偽と欺瞞」を見抜くのがアリョーシャである。

アリョーシャの二つの反応

ここでもう一度「大審問官」に対するアリョーシャの反応に戻ろう。彼の反応は全く相反する二つの方向でなされたのであった。まずは「兄さんの劇詩はキリストに対する讚美であって、弾劾ではない」。人間の弱さと卑劣さと愚かさ、つまりは「人間の中の悪魔性」についての指摘は措いて、彼はまず兄イワンのイエス・キリストへの深い洞察を見て取り、その見事なキリスト論に心を揺り動かされたのだ。

しかしこれがアリョーシャの最終的な判断ではなかった。「兄さんの大審問官は神を信じていない。それが秘密の全てです!」。イワンのキリスト理解を絶賛したアリョーシャは同時に、イワンが提示した大審問官の自由論の背後に、「神なき」イワンをはっきりと見て取ってもいたのである。イワンが讚美するキリスト、そのキリストとは何よりもまず、人間が絶対の自由の内に神に向かうことを望み、ゴルゴタ丘上の十字架にまで追いやられたのであった。このイエスの十字架を凝視し、「キリストの愛」を「この地上ではあり得ない一種の奇跡だ」とまで語りながら、「人間の中の悪魔性」を利用し、イワンの大審問官はイエス・キリストを斥け、彼が説いた神と人間を繋ぐ自由を奪い取り、人間を奴隷として支配してしまったのだ。この大審問官とは、無神論の上に神の代理人の役目を果たすローマ・カトリックと同じではないか。この後アリョーシャとイワンとの間で論じられる「大審問官」としてのローマ・カトリック教会論、殊にアリョーシャのイエズス会批判の背後には、ドストエフスキ自身^{スペース}が確信する「神なき」カトリック批判から、更には「神なき」社会主義批判が顔を覗かせ、彼の人間観と世界観と歴史観について考察すべき重大な問題が存在するのだが、今回はこれ以上論じる^{スペース}余裕がない。

「悲痛な調子」を以ってイワンが返す。大審問官は自らの「虚偽と欺瞞」を知りつつ、「悪魔の指示に従って」愚かで卑劣で弱い存在でしかない人間を導いている。彼の内にも人間への愛が脈打ち、その事業は「生涯その理想をかくも熱烈に信じ続けて来たその人[イエス・

キリスト]の名において行われる」。つまりそれは悲劇性を担った不幸な事業なのだ。

イワンの言葉は、最早アリョーシャには貧困な弁解にしか響かない。「この上ない悲しみ」を以って、アリョーシャから最後の判断・判決が下される。

「兄さんは神を信じていないのです」

「虚偽と欺瞞」。アリョーシャは人間とイエス・キリストと神の問題に関して、兄の認識の不徹底と誤魔化し、矛盾と分裂が存在することを明瞭に見て取ったのだ。影の薄い弱々しいアリョーシャ像を思い描くことは的外れである。『カラマーゾフの兄弟』においてゾシマ長老と共に誰よりも鋭い洞察力を持ち、強い愛情の主体がアリョーシャである。

イエス・キリストの接吻

神を見出していないイワン、神に見出されていないイワン。このイワンに向かい、なおアリョーシャはこれが本当に叙事詩の結末かと食い下がる。兄の心の最深奥にあるものが究極の「否定」なのか「肯定」なのか、藁にすぎる思いでアリョーシャはもう一度問い質したかったのであろう。

案の定、イワンはまだ「大審問官」の結末を語ってはいなかった。アリョーシャの問いに応じてイワンが最後に語るのは、大審問官に対して沈黙の内に接吻を与えて去るイエス・キリストである。自分を十字架上の磔殺に迫いやった裏切り者ユダの接吻（マルコ十四 45、マタイ二十六 49、ルカ二十二 47、[ヨハネ十八 3]）。その接吻に対して、逆になされるイエス・キリストからユダへの接吻。このキリストの接吻とはユダたる大審問官への接吻であり、また大審問官にひれ伏すもう一人のユダたる人間の弱さと卑劣さ愚かさ一切への接吻であり、つまりは「人間の中の悪魔性」への死を超えて燃え続けるキリストの信と愛と赦しの接吻に他ならない。アリョーシャの問いに対してイワンが返したのは、福音書との取り組みから彼が掘み出した究極絶対の「肯定」、「キリストの愛」の提示だったのである。この接吻こそ、ドストエフスキイが描き出した様々なイエス像の極北に位置するものと言うべきであろう（「ドストエフスキイのイエス像」については次の拙論を参照されたい。雑誌「アンジャリ」第33号、2017、6、親鸞仏教センター）

悪魔の凱歌

ユダたる大審問官へのイエスの接吻。だが実はこれもイワンの思索が至った究極の到達点ではなかった。続いてドストエフスキイが示すのは、イワンがなおその先に創り上げた恐るべき場面、イワンの内深くに根差す悪魔の否定の精神が最後の発動をする場面である。

大審問官は牢獄の鉄の扉を開け、イエス・キリストを「町の暗い広場」へと解き放つ。

「行け、もう来るな・・・二度と来るな・・・絶対に、絶対に！」（五五）

イエスを送り出したこの大審問官について、イワンはこう語る。

「この接吻は老人の胸の内に焼きつけられていた。
だが彼は己の^{イデオ}考えに踏み留まった」(五五)

この「だが」がイワンの心の最深奥にある一語であり、長い間モスクワで繰り返された思索と自問自答の一切が行き着いた究極の一語であると言っても過言ではないであろう。「神の必要性という観念」に取り憑かれ、また地上に満ちる不条理への怒りと苦悩に捕えられ、「ホザナ！」への希求とその否定との間に揺れ続けたモスクワ時代。神についての証が「否定するには余りにも多く、確信するには余りにも少ない」(パスカル) この地上の現実において、イワンはなお人間と世界と歴史を凝視し、その中に「隠れたる神」を探し求め続け、遂には「神の言葉」たるイエス・キリストの存在とその十字架、「キリストの愛」に行き着いたのだ。しかしこの「キリストの愛」を大審問官への接吻の内に見事に描き切った直後の「だが」。この「だが」によってイワンは、自分自身を究極の「否定」の闇の内に投げ込んだのである。

アリョーシャの接吻

神と「キリストの愛」を最終的に否定し、今や「カラマーゾフの下劣さの力」に立つことを宣言するイワン。兄の「重い病」をはっきりと知ったアリョーシャ。これら兄弟二人の間で激しい応酬が繰り広げられる。兄への愛ゆえに投げかけられるアリョーシャの激しく厳しい言葉にイワンは戸惑い、絶望と悲しみに捕われる。彼はアリョーシャの心が、この世に残された自分の唯一の「居場所」であると信じていたのだ。「俺は、アリョーシャ、ここを去るにあたって、俺にもこの世界にせめてお前一人はいてくれると思っていた」「しかし今、お前の心にも俺の居場所はないことが分かった」。

この時である。突然立ち上がったアリョーシャはイワンに歩み寄り、その唇に自らの唇をそっと押し当てる。

「盗作だ！」(五五)

イワンは歓喜の情に駆られて叫び声を上げる。

「お前、俺の叙事詩から盗み出したな！だが、有難う。立て、アリョーシャ。出かけよう。お前も俺ももう出かける時だ」(五五)

一人孤独の内に福音書との格闘から掘り当てたイエス・キリストの接吻。その接吻の内

に燃える愛の炎を、イワンは悪魔と共に「だが」の内に封印してしまっていた。今その封印が弟アリョーシャの接吻によって一瞬解かれたのだ。アリョーシャの接吻は、兄の「重い病」を見て取ったアリョーシャの已むに已まれぬ咄嗟の愛の表出だった可能性も高い。だがそれはイワンが十字架上のイエス・キリストの内に見て取り、大審問官への接吻として表現した「キリストの愛」をそのままイワンその人に伝え返す接吻となり、師ゾシマ長老が説く「実行的な愛」を生きて表現する接吻ともなったのである。この青年の凍てついた魂は今、弟アリョーシャの接吻によって再びこの荒涼たる地上世界における愛の可能性に目覚めさせられたのだ。「だが、有難う」。イワンの一瞬の「ホザナ！」である。振り子は否定から、再び肯定へと大きく揺れ戻ったのだ。

更なる「だが」

「だが」これはイワンの新たな試練の始まり、より正確には恐るべき否定のドラマの「終りの始まり」であった。イワンの内なる悪魔、その否定の精神はこの青年に向かって、今叫んだばかりの「ホザナ！」に対して、これでもかとはばかりに、またも新たな「否」を投げつける。スメルジャコフの登場である。『カラマーゾフの兄弟』のブラック・ホールとも言うべきスメルジャコフ。この「前衛的肉弾」に導かれ、父親殺しに踏み込んだイワンが辿る「悪業への懲罰」について、否定の精神が呼び起こす無間地獄に対し最後の「だが」が発されるドラマについては、次の最終章で確認しよう。

「地質学的変動」、「人神」思想の完成

悪魔が曝け出す若きイワンのモスクワでの思想遍歴。「大審問官」の叙事詩に次いで、その否定の精神が行き着く先は「地質学的変動」である。千兆キロの劫罰と「ホザナ！」の伝説が十七歳の時、「大審問官」の叙事詩創作が二十三歳の時。これらに対し、悪魔は「地質学的変動」はイワンがこの春故郷の家畜追込町に帰る準備をしながら纏め上げたもの、あるいは念頭に置いていた思想であることを仄めかす。悪魔はこれを叙事詩と呼ぶが、「大審問官」の叙事詩と同様に、実際にはこれが具体的論文の形を持つものであったのか、あるいは彼の頭の中だけに存在する思想であったのかは明らかでない。またゾシマ長老との対決の場で言及される論文、「教会裁判」に関する考察との前後関係も定かではない。しかし内容的にはこれが「大審問官」の叙事詩を踏まえた、二十四歳のイワンの思索の総決算と考えてよいであろう。彼はこの「地質学的変動」の思想と共に帰郷し、それを密かに異母兄弟であり下男であるスメルジャコフにぶつけ、町の上流夫人たちの集まりで披露し、更にはゾシマ長老やアリョーシャとの対決に備えるなど、故郷での自らの思想実験の根拠とも武器ともしたと考えられる。悪魔が語るイワンの「地質学的変動」の思想を以下に確認しておこう。

「彼らは全てを破壊して人肉を喰うことから始めようと考えている。愚か者どもめ。

この俺様に尋ねようともしないで！俺に言わせれば、何一つ破壊する必要などないのだ。人間の内にある神という観念を破壊しさえすればよいのだ。仕事に取り掛かるべきは正にそこからだ。そこから始めるべきなのだ。ああ、何一つ理解しない盲人どもめ！ひとたび人間が一人残らず神を否定しさえすれば(その時は地質学上の時期と並行して必ずや来るに違いない)、その後は人肉など喰わずとも自ずと旧来のあらゆる世界観や、そして何よりも旧来の道徳観の一切が崩壊し、新しきもの全てが到来するのだ」

「人間は神のごとき巨人のごとき倨傲の精神によって自らを高め、人神が登場するであろう。自己の意志と科学によって最早留まることなく自然を征服し、人間は他ならぬそのことによって、かつて天上に繋いだ喜びにとって代わる高らかな喜びを絶えず感じるようになるであろう。人間は誰もが自分がやがて死んで復活などありはしないことを知り、神の如く誇らしげに冷静に死を受け入れるようになるのだ。人間はその誇りから人生が一瞬のものに過ぎぬとも嘆くにはあたらぬことを悟り、最早何の報いも求めずに同胞を愛するようになる。愛は人生のほんの一瞬を満たすだけだ。しかし人がその刹那性を自覚しさえすれば、愛はかつて死を超える永遠の愛を渴仰して燃え上がったのと同じくらい激しく燃え上がることであろう」

「いったい何時、そのような時はやってくるのか。もしその時が到来すれば一切は解決され、人類は最終的な安定を見るであろう。しかし人類に深く根差す愚かさを思えば、恐らく今後まだ千年はその安定の到来はないであろう。それゆえ現在でも既にこの真理を認識している者は誰でも、全く好きなままにこの新しい原理に基づいて安定することが許される。その意味で彼には《一切が許されている》のだ。そればかりか、たとえそういう時期が決して到来しないとしても、いずれにせよ神も不死も存在しないのだから、この新しい人間は、たとえ全世界に一人だけしかいないとしても人神になることが許される。またこの新しい地位につく以上、必要とあらばかつて奴隸的人間が持ったあらゆる旧来の道徳的限界を平然と踏み越えることも許されるのだ。神には法律など存在しない！神の立つ所、即ちそこが神の座だ！俺の立つ所、それが直ちに至高の座となるのだ・・・《一切が許されている》、これでけりがつくのだ！」(十一9)

「肯定と否定」。モスクワで「神と不死」を求めるイワンが熱い心で仰ぎ見た肯定的価値の一切が、ここに百八十度否定の方向に転換され、地上に引きずり降ろされたと言えよう。悪魔の否定の精神が、ここに完膚なきまでに言葉を与えられたのだ。「大審問官」の叙事詩の結末に続いて、振り子は最終的に完全に否定の側に振り切れたのである。

満を持して故郷家畜追込町に乗り込んだイワンが、この「全てが許されている」という「人神」思想の絶対的有効性を証すべく開始するのは「神殺し」と「父親殺し」。修道院で沈黙と禁欲と祈りの内に「キリストの御姿」を守るゾシマ長老との対決と、異母兄弟スメルジャコフを「前衛的肉弾」としての父親フォードル殺しだ。「地質学的変動」において極限にまで煮詰められた論理は、現実世界において聖俗両極を代表する二人の否定と抹消という悪魔的試みとして具体化されるのである。アリョーシャが「重い病」の内にいるとするイワンがここにいる。アリョーシャが見つめるこのイワンとは、ドストエフスキイが人間の内に見つめる否定の精神、悪魔「ユダ」の姿そのものと言えよう。

イワン（三）「悪業への懲罰」

悲劇から喜劇へ

「神と不死」を否定し、「キリストの愛」を斥けたイワンが、悪魔と共に行き着いた「人神」の思想。だが実際に故郷で父親殺しへの一步を踏み出すや、イワンの内から現れ出るのは驚くべき小心さである。神に代って自らを「至高の座」に立たせたイワン。「一切が許されている、これでけりがつくのだ!」と高らかに宣言したイワン。だがこのイワンには「至高の座」に就く力など備わってはいなかった。「けり」などつきはしなかったのだ。「ユダ」イワンのドラマは悲劇から喜劇に転じる。ここにあるのは、イワンと彼が取り憑かれた否定の悪魔が「地質学的変動」の思想を超えて更に何処にまで行き着くのか、じつと見つめるドストエフスキイの冷徹な眼である。

代って主導権を奪い取るのはスメルジャコフだ。この「下男」、イワンとアリョーシャの異母兄弟たるスメルジャコフこそもう一人の「ユダ」であり、運命の不条理をその身に担わされてこの世に投げ込まれた「罪なき幼な子」、世の一切に対する否定の心、復讐の刃を一人片隅で密かに研ぎ澄ませてきた『カラマーゾフの兄弟』のブラック・ホールとも言うべき存在に他ならない。我々はこの青年が恋人のマリア・コンドラーチエブナに向かって語る言葉を忘れることはないだろう。「私はせめてこの世に生まれ出ないで済むのだったら、母の胎内で自殺することを[自分に]許したでしょうよ」。ユダの裏切りに当たってイエスが語った言葉、「人の子を賣る者は禍害なるかな、その人は生まれざりし方よかりしものを」。マルコが伝えるこのイエスの言葉(十四21)がこの時、スメルジャコフの内に響いていたどうかは明らかでない。だがスメルジャコフが自らを追い込んだ場とは、正にイスカリオテのユダが自らを追い込んだ場、「その人は生れざりし方よかりしものを」とされる絶対の悲劇的窮境に他ならなかったのである。

この「下男」こそが悪魔の否定の精神の権化であることも知らず、彼に「地質学的変動」の思想を吹き込み、父親殺しを唆したものの、逆に赤子の手を捻るようにいとも容易に主従関係を逆転させられてしまった「若旦那」イワンは、モスクワに逃げ帰る。神を否定し、更にイエスと「キリストの愛」を退け、遂には自らを神として故郷家畜追込町に乗り込ん

だイワンが唯一モスクワに持ち帰ったのは、己の「卑劣さ」についての痛切な自覚でしかなかった。

「悪業への懲罰」

父親の脳天を文鎮で叩き割った後、スメルジャコフがわずか三か月で迎える悲劇の道の行き着く先、それは痛切な罪意識との対決の末の縊死である。スメルジャコフが神に代って選び取った自己聖絶の道とは対照的に、「地質学的変動」の思想家であり、この上ない知性の働きを誇るイワンが迎えるのは、哀れで滑稽なほどの鈍感さの内に延々と続く道、父親殺しの罪の最終的な自覚に向けた悲劇的かつ喜劇的とも言うべき道程である。イワンとスメルジャコフとの三度にわたる対決劇とは、両者それぞれが神殺しと父親殺し罪の自覚に至る過程の詳細な報告書と言うべきものだ。ここでドストエフスキイが我々に示すのは、ゾシマ長老が予言した「悪業への懲罰」あるいは「キリストの律法」の現前、つまり罪人の良心に臨む懼るべき「裁きの神」との出会いのドラマである。「神には法律など存在しない！神の立つ所、即ちそこが神の座だ！俺の立つ所、それが直ちに至高の座となるのだ」「全てが許されている」。こう高らかに宣言し「あらゆる旧来の道徳的限界を平然と踏み越える」ことを目指したイワンが、その先自らを見出すのは皮肉にも「裁きの神の座」「キリストの律法」の正面であり、その末に横たわる「死の床」の内である。

周知の如く既に『罪と罰』においてドストエフスキイは、殺人者ラスコーリニコフの「悪業への懲罰」の心理をこの上なく詳細克明に辿っている。『悪霊』の主人公スタヴローギンが縊死に至るまでの悲劇的とも喜劇的とも言うべき長い道程。これもまた自らの犯した罪との正面からの対決をなし得ない卑劣漢が迎える哀れな道程であり、悪鬼に憑かれたニヒリストへの「悪業への懲罰」に他ならない。『カラマーゾフの兄弟』においてもまた、『罪と罰』全篇をわずか数ページに凝縮させるかのような鬼気迫る悲劇、「謎の訪問客」のドラマが見事に描き出される(六2D)。殺人者ミハイルが追い込まれる自らの罪との直面劇、若きゾシマによって導かれる懼るべき「活ける神」(ヘブル人への手紙十31)との出会いのドラマだ。そして『カラマーゾフの兄弟』後半で克明に描き出されるのは、これらのドラマ全てを総決算するかのような神殺しと父親殺し、イワンとスメルジャコフの良心に臨む神の裁き、「悪業への懲罰」あるいは「キリストの律法」現前のドラマである。ラスコーリニコフの斧の代わりに聖書を片手に持ったイワンと、この若旦那の征服者である下男スメルジャコフ。これら異母兄弟がドストエフスキイによって追いやられるのは「家畜追込町」、聖書の磁場と重ね合わされて展開する己の罪との対決劇である。そこに展開するのは二人の「ユダ」それぞれが歩まされる罪意識の清算のドラマ、懼るべき「活ける神」の許への召喚の全行程と言うべきものだ。(イワンとスメルジャコフに対する「悪業への懲罰」のドラマの詳細については、拙著『カラマーゾフの兄弟論』のVII B Cを参照されたい)。

かくして「神という観念」との直面を以って始まったイワンの神探求の旅は、自らの「前衛的肉弾」スメルジャコフによって最終的な罪の自覚に追い込まれた末に、とうとう次の

ような叫びに行き着く。

「神が見ておいでだ」(十一 9)

イワンの神探究の旅は、神に見つめられる自分を発見して、ひとまずはその幕を閉じる。ドストエフスキイはカント的認識論の内に封じ込められたイワンに、見事な神発見をさせたのである。

「死の床」を超えて

だがドストエフスキイは、イワンが辿る悪魔の否定の道をこれで終わらせることはなかった。その後この青年が辿るのはもう一つの懼るべき道である。神殺しと父親殺しに続いて、彼は異母兄弟スメルジャコフを「絞首台への道」に追いやってしまうのだ。イワンの内なる闇はなお深い。(この「兄弟殺し」については、拙著VII Cを参照)。続いて作者は報告する。法廷で父親殺しを告白したイワンが狂乱状態となって病院へと運び出されたこと。この青年を愛するカチェリーナが自らの許に彼を引き取り、世間の目など気にせず彼を看護していること。最大限に注目すべきはエピローグである。意識不明の状態に横たわるイワンについて、ここで相反する二つの方向に証言がなされるのだ。末弟のアリョーシャはコーリヤを始めとする少年たちに向かい、兄イワンが「死の床」にいると告げる。彼にとってはこの時、「重い病」を患う兄イワンの将来は決して明るいものとして捉えられてはいないのだ。だがこのアリョーシャに向かい、長男のドミートリイはイワンの将来について、弟とは全く逆の展望を語る。

「聞け。兄弟イワンは全員を超えるだろう。生きるべきは彼で、俺たちではない。彼は回復するだろう」(エピローグ 2)

神殺しと父親殺しと兄弟殺し。これら三重の罪業を背負って「死の床」に横たわるイワンの行方は決して明るいものではない。スメルジャコフを死に追いやったイワンについて知るのには、恐らくはスメルジャコフの婚約者マリアを除いて、アリョーシャのみである。アリョーシャの悲観的展望も決して故なきものではないのだ。だがアリョーシャとは逆に、イワンの将来の運命についてドミートリイが示す驚くべき洞察と展望、これが如何にして得られたのかどこにも描かれない。恐らく法廷でドミートリイは、人格崩壊の瀬戸際に立ちつつも、悲痛ではあるが見事な父親殺しの罪の告白を成し遂げたイワンの内に、この罪人を待つ光を直観したのであろう。

ここでゾシマ長老についても思い起こそう。「肯定と否定」に分裂したイワンの苦悩を見て取った長老は、彼がやがて行き着くべき絶対的「肯定」への道を指し示し、暖かい励ましの言葉を与えてやるのだ。

「肯定的な方向に解決されない限り、決して否定的な方向にも解決されません。あなたご自身がご自分の心のこのような特性をご存知でしょう。そしてそこにこそ、あなたの心の苦しみの全てがあるのです。だがこのような苦しみを苦しむことの出来る崇高な心をあなたに授けて下さったことで、創造主に感謝することです。

『高きを^{たか}惟い、高きを^{たか}求めよ』(コロサイ人への手紙三2、1)
『我らが^{われ}住まいは^す天^{てん}にあり』(フィリピ人への手紙三20)

神があなたの心の解決を、あなたがまだ地上にある内にあなたにお与えなさるように。そして神がどうかあなたの道を祝福なさいますように！」(二6)

作品が始まったばかりの第二篇(「場違いな会合」)。既にここで作者ドストエフスキイは、ゾシマ長老にイワンの分裂とその苦悩を見抜かせると共に、この青年が持つ「崇高な心」をも証^{あかし}させ、また彼が長い苦悩の末に向かうべき先が「高き」「天」であることを示させ、かつ神の彼への祝福を祈らせているのである。このゾシマ長老に対してイワンが返す接吻の「謎めかしさ」と「一種の厳肅さ」は、その場にいた全員を驚かせ、一瞬沈黙させ、アリョーシャの顔には「怯え」の表情さえ浮かんだと記される。

このゾシマ長老の言葉とドミートリイの言葉とは共に、作者ドストエフスキイ自身がイワンに託した言葉として受け止められるべきものであろう。だがドストエフスキイは、『カラマーゾフの兄弟』前篇を完成した直後に世を去る。「悪業への懲罰」を経て、やがて「死の床」から立ち上がるであろうイワンが、重なる己の罪業を背負い、具体的にどのような道を歩んで「高き」「天」に向かうのか、このことは書かれずして終わったのだ。だがドストエフスキイはこの作品の前篇において、「神と不死」を求めるイワンが歩む道に待ち受ける闇と共に、光についても既に十分に描いている。その光を頼りに、イワンに代って歩むべきことを託されたのは、他ならぬこの作品の読者である我々と考えるべきであろう。

ドストエフスキイのリアリズムの普遍性

イワンと向き合うこと、それはこの青年が人間の心に宿る「神」という観念、あるいは「神の必要性という観念」に目と心を釘付けにされることから始まり、荒涼殺伐たる地上世界においてイエスと「キリストの愛」と出会うに至るまでの、求道青年の熱烈な「神と不死」探究の旅に付き添うことである。またそれは同時に世界の不条理を見つめ、人間の弱さと卑劣さと愚かさを凝視する中から、神を否定し「キリストの愛」をも抹消するに至る青年と向き合うこと、つまり悪魔の否定の精神に取り憑かれ、自らを「人間の中の^{ユダヤ}悪魔性」に売り渡した青年思想家の「叛逆」から「人神」の宣言に至るまでの全道程を伴走させら

れることでもある。それに留まらない。イワンの故郷帰還後は、彼がゾシマ長老と対決し父フォードルを冷ややかに見つめる段階から、現実に長老の死と父親殺害事件を決定的な転回点とし、その悪魔的思想と行動が悲惨かつ喜劇的な解体に追い込まれる過程、つまりは「悪業への懲罰」「キリストの律法」の現前を目の当たりにさせられもするのだ。しかも作者のリアリズムにより、その罪意識の最終的な自覚と神との遭遇までのドラマの一切が、およそ想像し得る限りの高みと奈落、高揚と絶望の全振幅を以って我々の眼前に描き出されるのである。

イワンに限らない。ドストエフスキイが『カラマゾフの兄弟』で提示するものとは、我々人間全ての心に潜む「聖なるもの」への希求の心と、それを踏みにじる「人間の中の悪魔性」についての分析と証言であり、更にはその闇と光の分裂が最終的にどこに行き着くかについての、膨大かつ詳細克明な追跡の記録でもある。自らを「時代の子」「不信と懐疑の子」と呼ぶドストエフスキイ。この作家が焦点を絞ったイワンの内なる悪魔の問題とは、十九世紀半ばのロシアの田舎町「家畜追込町」に生きる人間の問題であるばかりか、二千年前の福音書世界が輝かしいキリスト論の背後に隠してしまった弟子たちの問題であり、かつ二十一世紀、非聖化の極を生きる我々が正に直面する喫緊の問題でもあるのだ。かくして我々は、出発点の「一粒の麦」の死の譬えに戻ることになる。

イワンを通し「人間の中の悪魔性」を完膚なきまでのリアリズムを以って描き尽した『カラマゾフの兄弟』。この作品を我々は現代における第五福音書として向き合い、自らの内なる悪魔性、「其の信仰なきと、其の心の頑固なると」を滅ぼし尽くし、自らの「一粒の麦」としての運命を担うべく起ち上がることを迫られていると言えよう。

[了]

《参考文献》

- ★本論のユダの人間論とキリスト論、十字架に対する罪意識の問題、闇と光の問題等に関して、筆者が常に参考にさせて頂いているのは以下のものである。
 - ・小出次雄『基督教的空間論としての ゴルゴタの論理』[1949]（驢馬小屋出版、1984）。
 - ・西田幾多郎『場所的論理と宗教的世界観』、『哲学論文集 第七』岩波書店、1946
 - ・小林秀雄『カラマゾフの兄弟』[1941-2](改定)小林秀雄全集・6、新潮社、1978
 - ・R.オットー『聖なるもの』山谷省吾訳、岩波書店、1968
 - ・南原実『極性と超越—ヤコブ・ペーメによる錬金術的考察』新思索社、2007
- ★新約聖書学の角度から分析されたユダ、並びに弟子たちの裏切りの問題、またイエスの十字架を巡る問題等については、主に以下の書物を参考にさせて頂いた。
 - ・佐藤研『悲劇と福音—原始キリスト教における悲劇的なもの』清水書院、2001
 - ・荒井献『ユダとは誰か—原始キリスト教と『ユダの福音書』のユダ』岩波書店、2007

- ・同『ユダのいる風景』岩波書店、双書 現代のカルテ、2007
- ・同『荒井献著作集・第三・四・五・八巻』岩波書店、2001
- ・佐竹明『新約聖書の諸問題』新教出版社、1977
- ・同『使徒パウロ―伝道にかけた生涯』NHK ブックス、1981
- ・八木誠一『パウロ』清水書院、人と思想 63、1980
- ・大貫隆『イスカリオテのユダ』日本キリスト教団出版局、2007
- ・同「ユダとイエス ユダの福音書に寄せて」東北学院大学キリスト教文化研究所紀要、第二十七号、2009
- ・同『イエスという体験』岩波書店、2003
- ・同『イエスの時』岩波書店、2007
- ・青野太潮『「十字架の神学」の成立』ヨルダン社、1989
- ・同『「十字架の神学」の展開』新教出版社、2006
- ・同『「十字架の神学」をめぐって』新教出版社、2011
- ・同『パウロ 十字架の使途』岩波書店、2016
- ★新約聖書については、ネストレ・アーラント編『ギリシャ語新約聖書、二十七版』(Deutsche Bibelgesellschaft, 1993) を用い、引用には『舊約新約聖書』(文語訳、日本聖書協会、1967) を用いさせて頂き、佐藤研編訳の『福音書共観表』(岩波書店、2005) も参考にさせて頂いた。
- ★ドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』については、アカデミー版ロシア語三十巻本全集(レニングラード、ナウカ社、1972-90)の第十四・十五巻(1976)を用い、引用部分は筆者が訳出した。
- ★本論と関係する筆者の主な論考については、以下の通りである。
 - ・芦川進一「ドストエフスキイにおけるイエス像」大貫隆・佐藤研編『イエス研究史』所載、日本基督教出版局、1998
 - ・同『「罪と罰」における復活』河合文化教育研究所、2007
 - ・同『ゴルゴタへの道』新教出版社、2011
 - ・同『カラマーゾフの兄弟論―砕かれし魂の記録―』河合文化教育研究所、2016
 - ・同「イワン・カラマーゾフのキリスト―「大審問官」、福音書からのアプローチ―」ドストエフスキイの会編『広場』第26号所載、2017

《付記》

[1].

新約聖書学の分野において、十字架上に磔殺されたイエスの悲劇的形象に焦点を絞り、それに対する弟子たちの「負い目」、「罪責感情」がイエスの死に対する「喪の作業」と

して生み出したものがマルコの「受難物語」であり、またパウロの「十字架の神学」であったとする注目すべき論考を発表したのが佐藤研氏である（『悲劇と福音』、2001）。

今世紀初頭に出されたこの論考に続き、『ユダの福音書』のコプト語原文からの英訳の公刊（2006）を機として、改めてユダに強い光が当てられ、荒井献氏や大貫隆氏等の新約聖書学者たちによってユダに関する論考が次々と世に出されるに至った。荒井氏は的確な新約聖書学的分析により福音書テキストにおけるユダ像を浮き彫りにし、イエスを前に人間誰もがユダたる定めを負うこと、また福音書が提示するイエスとはそのユダさえも受け入れ、赦すイエスであることを提示する。更にまた氏は、西洋において古来ユダの存在が如何に強く人々の心を捉え、文学・思想・宗教等の分野において如何に広く形象化されてきたか、アンソロジーを提示している。

大貫氏も荒井氏と同じく福音書テキストにおけるユダ像を的確に整理し、更に『ユダの福音書』がグノーシス主義の展開の中で生み出された神話であること、そこにおいてイエスとユダとは、本来この穢れた地上世界とは「別の大きいなる、聖なる世代」に属する光の存在であったこと、そしてユダはイエスの「真の私」が解放され再び本来の光の世界に戻ってゆくために、イエスを「裏切って」その肉体を死に引き渡すべき使命が託された存在であること等を明らかにする。また氏は聖書テキストの分析からは、ユダの裏切りの動機は明確にはならないものの、古来多くの人々がユダについて様々な考察を展開してきた事実の重さを指摘し（大貫氏も荒井氏と同じくユダに関する文学・思想・宗教等の領域での考察のアンソロジーを提示する）、我々がなおユダによるイエス引き渡し [=裏切り]の動機を内的にも外的にも追い求め、この存在に関する考察を続けてゆく必要を力説する。

なお新約聖書学の分野では、「十字架につけられ給ひしままなるイエス・キリスト」に焦点を絞り込み、「十字架の神学」を展開する青野太潮氏の研究も注目される。

これらの研究がドストエフスキイの聖書との取り組みとイエス理解、そして彼のキリスト教思想解明に大いに参考となるものであることは疑いない。残念ながら今回は、それら一つひとつを正面から取り上げて検討するという余裕はなかった。将来の課題としたい。

[2]

ところでこのユダの問題に関しては、日本において既に半世紀以上前に正面から光を当て、ユダ的人間論と「相互磔殺」の概念を核として、イエス・キリストの出来事全体を強固な論理の内に捉える試みが哲学者小出次雄によってなされ、極めて高いレベルで完成を見ている。小出は京都大学の西田幾多郎の下で哲学を、波多野精一の下で宗教学を学び、更に父祖以来のプロテスタント信仰と静座体験と様々な芸術体験、更には R.オットーの『聖なるもの』を土台とし、アカデミズムの世界からは離れた場に立って哲学的・宗教的・芸術的思索と創作を展開し、その集大成として終戦直後に、論文「基督教的空間論としての ゴルゴタの論理」を著わすに至った（驢馬小屋出版、1949）。

筆者は『ゴルゴタへの道』において小出の「相互磔殺」の概念を取り上げ、続いて『カラマーゾフの兄弟論—砕かれし魂の記録』においてもユダ的人間論の問題、更には十字架を前にした人間の罪意識とその清算の問題について、ゾシマ長老の「悪業への懲罰」論を核とし、イワンとスメルジャコフの罪と罰のドラマを追ったのであるが、その際に考察の主な土台としたのは小出の上記の論文と、西田幾多郎の最終論文（「場所的論理と宗教的世界観」1945）、そして小林秀雄の「カラマアゾフの兄弟」（1941-2）である。

注目すべきことに、これらは奇しくも全て太平洋戦争の末期、終末論的状况にあった日本でなされたドストエフスキイとイエスとの正面からの対決の記録と言えるであろう（上記拙著『ゴルゴタへの道』）。日本の宗教・哲学・思想・文学・芸術の流れの中に、これら先哲の思索を始めとして、聖書とドストエフスキイがどのように受容され対決されてきたかを明らかにし、また今後如何にこれらの問題と取り組んでゆくかを考えることは、我々に残された大きな課題である。

《本論成立の経緯》

本論の土台となった考察について、また関連する考察についても以下に記しておく。

2015年5月5日、上智大学で開催された日本キリスト教文学会創立50周年記念シンポジウム；「ドストエフスキイと現代—アポカリプスの予言とその行方」において、筆者はパネリストとして『「一粒の麥」の死の譬え—『カラマーゾフの兄弟』のユダ的人間論—』という題目で問題提起をした。このシンポジウムでの発表は、既に取り上げてあった『カラマーゾフの兄弟論』を基に、ユダに関する考察を加えてなされたものであるが、その後この発表を土台とし、改めて「一粒の麥」の死の譬えとユダについて、またこれにイワンについての考察を加え、同じタイトルの下に論文として書き上げたものが『キリスト教文学研究』に収録された（第33号、創立50周年記念号、日本キリスト教文学会、2016年5月9日）。

『カラマーゾフの兄弟論』からシンポジウムでの発話へ、そして学会誌への論文化から、改めてこの「研究会便り(3)(4)(5)」へ。本論はこれら四段階の考察の結果としてあり、その途中にはシンポジウムでの発話も入り、文体も大きく変化している上に、内容的な面でも重点が少しずつ移動してきている。また取り上げたテーマは、聖書世界とドストエフスキイ世界とに跨る大きな問題であり、聖書世界についての分析を始めとし、この考察が今回を以て終了したということはある得ない。取り組みは更に続けられねばならないだろう。

殊にイワンについての考察は『カラマーゾフの兄弟論』以後も続いている。2016年3月19日、筆者は「ドストエフスキイの会」の第232回例会において「悪魔が明かすモスクワのイワン—「ロシアの小僧っ子」が辿った「神と不死」探求の足跡—」という題目で、拙著『カラマーゾフの兄弟論』を基に、イワンについての考察を報告した。これを文章化したものが、同会の会報誌『広場』第26号に掲載される予定である（2017年4月）。これはモスクワにおける

イワンの思索の跡を辿るにあたって、主に彼の「大審問官」の叙事詩における聖書との取り組み、殊にイエス・キリスト把握の問題に焦点を絞ったものである。今回の「研究会便り(5)」においては、この『広場』のイワン論と、また『カラマーゾフの兄弟論』とも記述が一部重複することをお断りしておく。認識の重なるところを、わざわざ記述を変えてまで表わす必要を感じなかったからである。

恐らくイワンという青年は、ドストエフスキが自らの「神と不死」探求における試行錯誤の全てをそこに投げ込んだ人物であり、我々がドストエフスキについて、その「神と不死」の思索について、またイエス・キリストや神について考えようとする際に、ゾシマ長老やアリョーシャと共に良き伴走者となってくれるであろう。筆者も繰り返しイワン論と取り組んでいるように、イワンの全貌を言葉で捉えることは決して容易ではない。だが本論でも記したように、我々の内なる「神」という観念、あるいは「神の必要性という観念」の不思議と素直に向き合い、それと命懸けで取り組み、やがて没落してゆくこの「ロシアの小僧っ子」の姿は、「神も仏もない」ままに、平然と頹落した日常を生きる現代の我々日本人にとっては、この上ない魂の「教師」あるいは「反面教師」としての役割を果たしてくれるに違いない。この「研究会便り」に触れられた皆さんも、是非自分自身の角度からイワンと取り組み、自らのドストエフスキ世界理解の幅と豊かさを増し加えて頂きたいと思う。